参考文献

秋山洋一(1989)「景聡臆断系抄物に見られる漢字音注とその引用書類—虎哉本『碧巌録抄』を中心として—」『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』3

出雲朝子(1982)『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』桜楓社

今枝愛真(1955)「玉塵の著者について」『日本歴史』84

(1966)『禅宗の歴史』改定増補版　至文堂

遠藤邦基(2002)『読み癖注記の国語史研究』清文堂

大島正二(1997)『中国言語学史』汲古書院

奥村一雄(1973)『聚分韻略の研究付古本四種影印慶長版総索引』風間書房

小倉肇(1991)「韻書について(1)」『弘前大学教育学部紀要』66

(1992)「韻書について(2)」『弘前大学教育学部紀要』67

(1995)『日本呉音の研究』新典社

川瀬一馬(1986)『増訂古辞書の研究』雄松堂出版

来田隆(1971)「抄物に於ける『清(スム)』『濁(ニゴル)』注記について」『国語学』84

(2001)『抄物による室町時代語の研究』清文堂

佐々木勇(2002)「日本漢字音における反切・同音注の仮名音注・声点への反映について—金沢文庫本『群書治要』鎌倉中期点の場合」『国語学』53-3

佐藤喜代治編(1989)『漢字講座2漢字研究の歩み』明治書院

鈴木博(1984)『室町時代語論考』清文堂

(1988)『室町時代語の研究』清文堂

住吉朋彦(1997)「〔元〕刊本系『古今韻会挙要』伝本解題」『日本漢学研究』1

高松政雄(1971)「漢音—文明本節用集の検討—」『岐阜大学研究報告(人文科学)』20

(1976)「『呉音』の清濁」『国語国文』45-11

(1977)「『正音』の清濁—名義抄の性格の一面—」『国語国文』46-11

(1987)『日本漢字音概説』風間書房

(1993)『日本漢字音論考』風間書房

(1997)『日本漢字音論究』風間書房

中澤信幸(1998)「日遠の『広狭』」『名古屋大学国語国文学』83

(1999a)「一七世紀初頭における『古今韻会挙要』の受容―日遠『法華経随音句』を中心に―」『愛文』34

(1999b)「江戸時代における漢字音研究の変遷―『古今韻会挙要』はなぜ使われなくなったか―」(国語学会平成11年度秋季大会研究発表要旨集)

中田祝夫(1983)「日本の古辞書」『古語大辞典』「附録」小学館

西崎亨(1995)『日本古辞書を学ぶ人のために』世界思想社

沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史』東京堂

芳賀幸四郎(1981)『芳賀幸四郎歴史論集Ⅰ 東山文化の研究(上)』思文閣出版

花登正宏(1997)『古今韻会挙要研究―中国近世音韻史の一側面―』汲古書院

林史典(1988)「日本漢字音と反切―明覚『反切作法』および文雄『翻切代柯篇』の反切法―」『文芸言語研究言語篇』15

福島邦道(1962)「連声と読み癖」『国語学』52

松井利彦(1971)「近世漢学における漢字音の位相」『国語国文』40-5

(1976)「近世前半期の漢字音の清濁」「国語国文」45-1

馬渕和夫(1956)『日本韻学史の研究』Ⅱ 学術振興会

(1970)『韻鏡校本と広韻索引新訂版』「第三部研究篇」巌南堂書店

柳田征司(1975)『詩学大成抄の国語学的研究研究編』清文堂

(1998)『室町時代語資料としての抄物の研究』武蔵野書院

山田潔(2001)『玉塵抄の語法』清文堂出版

湯沢幸吉郎(1981)『室町時代言語の研究』風間書房

湯沢質幸(1986)『唐音の研究』勉誠社

(1996)『日本漢字音史論考』勉誠社

(2001)『古代日本人と外国語』勉誠出版

李承英(2002a)「室町時代における呉音と漢音—『玉塵抄』を中心に—」『日本学報』53

(2002b)「玉塵抄における反切と字音」『筑波応用言語学研究』9

(2003a)「室町時代抄物における清音と濁音」『日本語と日本文学』37

(2003b)「玉塵抄における引用文献」『筑波応用言語学研究』10

和島芳男(1965)『中世の儒学』吉川弘文館